

アリス・ミラー著

魂の殺人

読後感はあまりに重い。それは、教育やしつけという名のもとに、当然のように家庭で繰り返されてきた行為の恐ろしさを指摘しているからだ。この指摘に無縁だと言いつける人がどれほどいるだろうか。

「教育は有害だ」と、二十年にわたって心理療法に携わった著者は言う。「教育の中に見えるのは大人の側の自己防衛であり、大人が不自由であり不確かであるがゆえに弄される策略ばかりです」。教育が引き起こした悲

家庭で繰り返される

有害な教育

劇の例として挙げられるのは、薬物中毒のクリスティアーネ・F、四人の少年を殺したユルゲン・バルチュ、そしてアドルフ・ヒットラー。三人の幼年期を検証するうちに、いくつかの共通項が浮かび上がる。

親のひどい虐待。しかも徹しく権威主義的な空気の中で、憤りや悲しみなどの感情は押し殺される。せき止められた憎悪は、本来の対象ではなく、自分や他者の破壊へと爆発する。

程度の差はあれ教育に

は常にこうした側面がつ

きまとう、と著者は直覚る。

両親はいつも正しく、ひ

どい仕打ちも愛情の表現

だとする確信の根深さ。こういう教育を受けた人が親になれば、同じように子供に接するしかない。邦訳に寄せられる投書も、「自分も親に虐待された」「子どもを愛せない」という二つの内容に大別されるという。

著者の研ぎ澄まされた直観と洞察から生まれた本書は、正統な精神分析理論への批判も含み、刊行当時は学会から無視された。だが、欧米でミリオンセラーとなり、社会的に大きな影響を与えている。日本では今、再び売り上げが伸びているようだ。

■ ■ ロングセラーの

周辺